

## 11) ヤツデ=八手

ヤツデはウコギ科の常緑低木で、本州の福島、宮城県南部より南の四国、九州などの海岸近くの森林などに自生する。高さは約3mに達し、樹皮は灰白色で、茎は株立状に数本集まって、まばらに枝を出す。葉には長い葉柄があって、濃緑色で光沢があり掌状に7~9裂する。掌の先端は尖り、縁には鋸歯がある。晩秋から初冬にかけて枝先や葉腋に大型の円錐花序をつけて、白色で5弁の球形状に集まった小花を多数開く。雌雄異花で、果実は直茎8mmほどの小球形になり、翌年の春に黒く熟す。和名の由来は葉が掌状に分裂しているためで、実際には9裂することが多く、偶数になることはほとんどない。別称としてヤツデノキ、オキノテ、テングノハウチワ、テングノテ、ウシオウギなど、さまざまなものがあり、すべて大きな葉の特徴を表現したものである。このうちウシオウギ(牛扇)の由来は、この葉で牛小屋の蠅を追うのに使ったためである。学名は『*Fatsia japonica*』で、属名はヤツデの八の発音を表わしたものとも、八手(ハッシュ)の読みを表わしたものともいわれている。イギリスでは『*Japanese Aralia*』、中国では『八角金盤』もしくは『金剛纂』で、ともに葉が固いことに由来する名称である。

ヤツデの小葉は7、9、11枚が多く見られるにもかかわらず、八つ手としたのは末広りの八の字に、縁起の良さを求めたからであろう。このことがヤツデの運命を決定的に決めることとなった。常緑であることも幸いして、邪悪なものへの進入を防いでくれる木と考えられるようになり、庭木として玄関や門のそばに植えられるようになった。鹿児島県などでは昔は近隣に伝染病が発生したりすると、村落の入り口や門のところに縄を張り、ヤツデ、ナンテン、コショウを吊るして「なんでん来たときゃ、やつででつかまえ、コショウを食わして毒を消す」と唱えて疫病を追い払った。

ヤツデは日本の特産種で特異な葉を持っていたにもかかわらず、人々に意識されるようになったのは遅く、万葉集や勅撰和歌集などには登場しない。いろいろな植物が注目されるようになった元禄時代の園芸書でも、その名をとどめることはなかった。江戸時代の文献では、1709年に編纂された『大和本草』が、わずかに解説しているに過ぎない。当事の江戸では余り栽培されていなかったのだろう。しかし観葉植物としてフクリンヤツデやシロブチヤツデ、キモンヤツデなどがあり、『草木奇品家雅見』(ソウモクキヒンカガミ)には、フクリンヤツデが紹介されている。一方これを海外に紹介したのは他でもない江戸時代に長崎に来航したツェンベリーであった。このときの学名は『*Aralia japonica*』で、アラリア属の1種とされたが、その後日本独自の種として、『*Fatsia*』属が創設された。イギリス名には当初の学名が反映されている。またヤツデの実物をヨーロッパにもたらしたのはシーボルトで、日本と所縁深い2人の博物学者がこの植物を世界へ紹介したことは興味深い。繁殖は挿し木、実生、株分などで、適潤地であればよく育つ。斑入り種は観葉植物としても見ごたえがある。



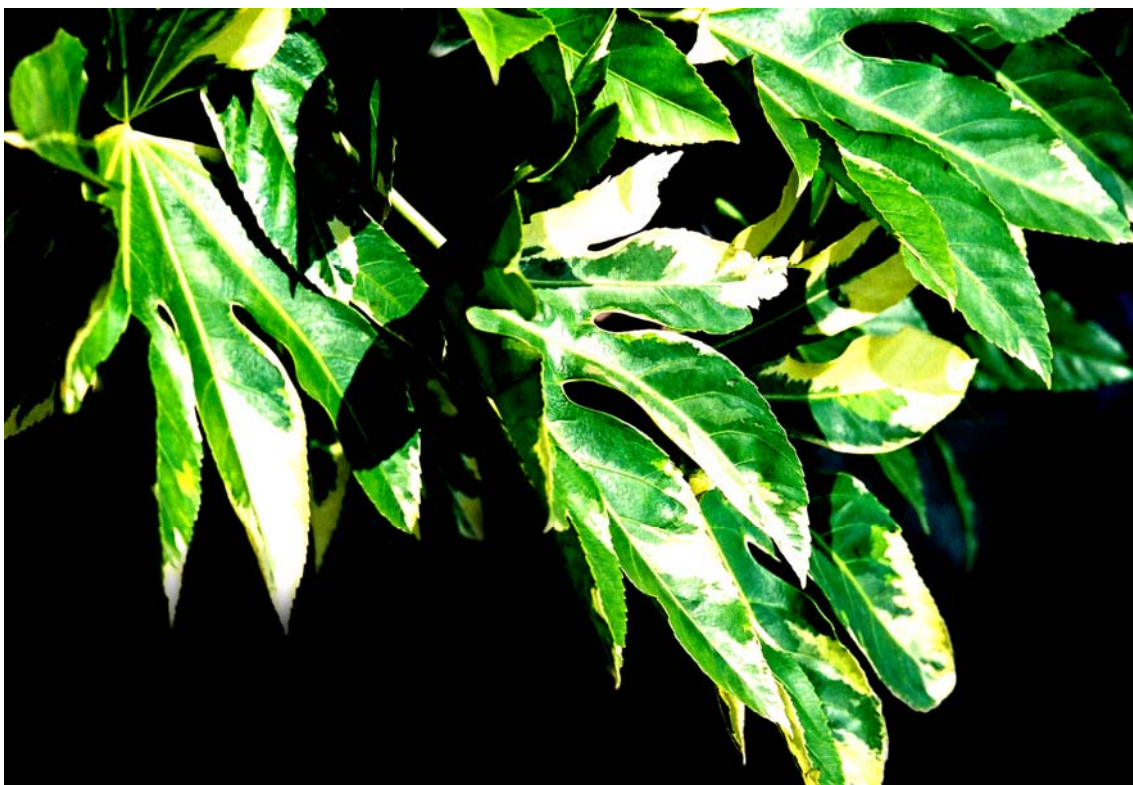
小花が集まって球状になるヤツデ。芳香が漂うためミツバチが集まってくる。大きな葉で魔物を追い払うとの俗信から、家庭でもよく植えられたが、今ではそんな家も少なくなった(さいたま市浦和区)。



近寄ってみるとこんな表情をしている(さいたま市浦和区)。



ヤツデの花は蜜を多く分泌するものと思われミツバチのほかアリの集まる。魔よけのほか常緑であることと、大きな葉を利用して目隠しに植えることも多い(さいたま市浦和区)。



斑入り葉のヤツデ(さいたま市緑区)。

[目次に戻る](#)